



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	近松秋江論 : 後期自然主義文学の発端
Author(s)	和田, 謹吾
Citation	北海道大学人文科学論集, 6, 1-25
Issue Date	1968-07-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34290
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_PR1-25.pdf



近松秋江論

——後期自然主義文学の発端——

和田 謹 吾

一、秋江論の意味

自然主義が日本の近代文学に与えた影響はきわめて深くかつ大きい。それは、見方によってはこんにちまで尾を引いているということもできよう。しかしそれにも拘らず、隆替のはげしかった近代文学史の上では、自然主義思潮が文壇の主流であり得た時期は、こんにちではきわめて短期間であつたと考えるのが普通になつて⁽¹⁾いる。したがって、その短期間をなかに挿んで、自然主義的な動きを見せながら文芸思潮としてはまだその時代を迎えない時期のものを前期自然主義文学と呼んだり、すでに主流としての時期を過ぎた後のものを後期自然主義文学と呼んだりするのが普通である。そのうち、「前期自然主義」の名称に関しては、吉田精一氏が問題を提起⁽²⁾して以来、その名称の使用が厳密に検討されるようになったが、「後期自然主義」の用法についてはこんにちのところまだかなり乱れているといわざるを得ない。それは、この語の発生以来の習慣による用法と、こんにちにおける学問的判断による用法とが混在し、しかも学問上でも「後期」という概念が安定していないためである。

たとえば、本間久雄氏が『統明治文学史・下巻』（東京堂・昭和三九・一〇）で立てる後期自然主義の時代区分は、島

村抱月が明治四十一年一月の論文「文芸上の自然主義」（『早稲田文学』）において用いた用法をそのまま踏襲するもので、小杉天外などを代表とする前期に対して「仮りに時を限れば島崎藤村氏の『破戒』国木田独步氏の諸短篇等が世の批評に上った頃を其の端緒」と見る抱月の後期自然主義の定義に従っている。⁽³⁾しかし、抱月の場合は明治四十一年という自然主義最盛期における概念規定であり、こんにち、完結した自然主義運動の総体を歴史的に捉え得る時点においては、このような用語はすでに歴史的なものといわざるを得ないであろう。すなわち前述のように、自然主義の最盛期を本期という捉え方をして、それに対して前期、後期を考えるのが普通である。したがって、本問氏の用語はこの用語の発生に対しては忠実な用語であるが、こんにちとしてはその概念は一般性をもたないと云えるであろう。

それでは、自然主義本期に対する後期自然主義という用語からすれば、その後期自然主義とはどの範囲のものを指すのかということになるが、それが、本期を明治四十三年までとする説と明治末年までとする説とですでに上限が安定しないし、さらにはその後の自然主義的な文学の動向をさらに細分して考える方法もあって、その場合、上限がもつと時期的に下がる考え方もある。たとえば久松潜一氏の編になる『日本文学史・近代』（至文堂・昭和三二・六）には「早稲田派と後期自然主義」という項目がある。これは吉田精一氏の編集により片岡良一氏の分担執筆になる項で、その時代区分と名称とが誰の意志であるかは必ずしも明瞭ではないが、その頃の冒頭には、

『新思潮』派を中心とする新現実主義時代に、新しく頭を擡げて来た自然主義系統の人々——つまり後期自然主義の中心をなしたのが、奇蹟派の人々や少し遅れて彼等と親しむようになった宇野浩二などであった。」

と述べられている。この稿は、のちにはぼそのまま片岡良一氏の『自然主義研究』に収録され、「後期自然主義の人々」と題されて同氏の自然主義論の重要な一章を構成しているから、片岡氏の説と理解してよいのであろうが、そこで扱う内容は「奇蹟」派の広津和郎、葛西善蔵、および宇野浩二などばかりでなく、嘉村磯多、牧野信一、さらには大正中期以降の白鳥、秋声、藤村、花袋などにも叙述が及んでいて、右に掲げた定義が必ずしも厳密にその時期や範

囲を示しているとは考えられない。また同氏編の岩波小辞典『日本文学—近代』には「後期自然主義」の項目があって、「新現実主義化した自然主義の伝統が後期自然主義だ」と解説し、花袋の『残雪』（東京朝日新聞）大正六・一（七・三）や藤村の『新生』（東京朝日新聞）大正七・五（八・一〇）などをまず目につく道標として、心境主義化、身辺雑記化の道をたどって、私小説としての完成を示すに至った一連の系統のものを指すのだと述べている。

これを要するに「後期自然主義」という概念はまだそれほど明確ではないし、心境主義化、身辺雑記化から私小説の完成への道程を見通す傾向のものならば、大正七、八年以降の時限を限って後期自然主義と名付けなければならぬ理由も特にはないのではないか。自然主義本期が崩れたあとは、すでにその方向への歩みを必然としていたとも考えられるし、私小説に関しては平野謙氏に「大正二年九月、近松秋江が『疑惑』を発表したとき、わが国独特の私小説形式はほぼ完璧に樹立されたのである。」という発言がある。この説を承認すれば、後期自然主義の範囲は明治末期にまでさかのぼって来ていいのではないか。平野氏もいうように『疑惑』は『別れたる妻に送る手紙』の続篇として書かれ、突然それだけとしてあらわれたものではない」からである。ここで注意すべき符合は、「完璧な私小説」といわれる作の出発点となった秋江の「別れたる妻に送る手紙」の発表が明治四十三年四月（以降七月まで「早稲田文学」に連載）であり、それが自然主義本期の下限と考えられる明治四十三年説と一致することである。

近松秋江は、従来の自然主義研究の上ではとり残されて来た作家であり、吉田精一、片岡良一両氏の大冊の自然主義研究書中にも特には扱われなかった作家であるが、彼の小説は明らかに花袋らの自然主義の影響下に始まったと考えられるし、しかしまた一方に花袋、藤村などよりは一時期ずれていることも明らかで、それは当然作品としても異質な要素をもっていることになり、自然主義本期の花袋、藤村などと同時に論ずることはできない。

以上のような理由から、わたくしは明治四十三年、明らかに自然主義が文学史の主潮たり得なくなった時期から後を後期自然主義として捉えることが適当と考え、その発端を近松秋江に求めることが、その時期の文学傾向を考察す

る上で最も適当だと考えるのである。そこで、ここには近松秋江の「別れたる妻に送る手紙」から「疑惑」に至る間の問題を考えて見たいのだが、そのためには、まず秋江にとって文学とは何だったのかを考えておくことが、彼の文学を解く上で大切なことであると思われる。

二、秋江における文学

近松秋江は明治九年（一八七六）五月四日、岡山県和気郡藤野村大字藤野字田ヶ原に、酒造業を兼ねた農家徳田啓太の四男として生まれた。秋江の本名は徳田丑太郎、明治二十五年に浩司と改名、筆名の秋江は、明治三十四年島村抱月のすすめで読売新聞に寄稿するようになった時、「秋の寂びた入江とか湖水とかいふやうな風景が好き」⁽⁶⁾だというのでみずからつけたものであり、以後徳田秋江の筆名を用いたが、それが徳田秋声の門下のごとくに見られることを嫌い、かつは彼が一時期心酔したといわれる近松門左衛門にあやかる意味をも兼ねて、近松秋江を名乗るようになったといわれる。その時期は明治四十四年ごろから始まり、しばらく徳田秋江と混用、大正五年ごろから近松に定まったものらしい。

さて、秋江は明治十六年八歳の時、隣村の天台宗の寺（安養寺）の旧庫裡に設けられた小学校へ通うようになり、かたわら、巡回して漢学を教える老人から、『大学』『中庸』『論語』などの素読を学んだという。夏目漱石が大学予備門を受験するために漢学塾から英語塾に転じたのが明治十六年であり、森鷗外がドイツ留学の途についたのが明治十七年、島崎藤村が英語を学び始めて父が心痛したというのもその年であることを考えれば、秋江がこの時期に四書の素読を受け始めたということは、秋江の基礎教養の古さを思わせるが、それは中央を遠く離れた農村ではむしろ当然であったのかも知れない。とにかく秋江の基礎教養がそのようなものによって形成され、以後の中等教育についてはしばらく正規の学業の段階を踏まなかったことは、彼の人間形成、思想形成上にかなり重要な影響があったと思

われる。そしてそこにまず秋江における文学の基本的な問題があったはずである。すなわち、秋江は十一、二歳ごろから『日本外史』を愛読したというが、それについて後に彼は次のように述べている。

「自分が日本外史を愛読する所以のものは、其の中に我が日本人中にあつて最も高調なる感情生活に生活した弾力に富む人間が充満してゐるからである。死生固より命あり、吾等は徒らに寿を食ふことのみに考へてはならぬ、古の武士時代は固よりさうであつた。生命の尊きことを知つた今日と雖も、必ずしもさうでないとは言へない。(中略)

死は、その情状によつて、常に人間の個性を飾る。死にして免るべからざるものとせば、吾人は、死によつて如何に吾が生活を飾るべきかを考へねばならぬ。併もそれは飾らんが為に飾るにあらず、高調なる感情生活が偶々持来らす自然の結果である。さうして是等の武人の忠死と治兵衛小春の如き情死とその動機と形式とに於て非常に相違してゐるかの如く見えてゐるが、その至誠の感情の徹底して其処に到着した点に於ては二つながら相同じいと言はねばならぬ。山陽の如き近松の如きその芸術的感情によつて、一つの高められたる世界を造つて見せてゐる。」(一)

これは後年の文章だけに、初期の秋江の志向とのちのそれとを統一的に論じており、そこに秋江における文学の一侧面を見ることもできて興味深いのであるが、とにかく少年秋江がどのような態度で『日本外史』を耽読し、文学になを求めていたかをここで注意しておくべきだろう。

そのような秋江は、高等小学までは首席で通したが、明治二十五年十七歳で岡山中学に入学後は、英原書を用いての授業に苦しんで翌年みづから退学、二十七年大阪市立商業を受験したが体質虚弱の理由で入学できず、その年の九月に上京して慶応義塾に入学、十一月父死去のため帰郷退学、二十九年再度上京して神田の国民英学会で英語、麹町の二松学舎で漢学を学んだが、三十年の五月以降は病氣勝ちで自然に登校を廃し、帰郷・上京をくりかえして三十一年九月四度目の上京で東京専門学校に入学、文学部歴史科から英語政治科、英文科と移つて三十四年七月にその英文科を卒業した。さきに、正規の学業の段階を踏まなかったと述べたのは、このような状態をいったので、秋江はそれ

を「疑惑」のなかで「自分の中学校を卒業しなかった為に一生の目的を踏み違へた後悔」というふうに述べているが、秋江はそのような段階のなかでずいぶんその志をゆがめられて来たものと思われる。

そこで、そのあとを辿って、このような時期に秋江がどのような読書歴をもち、それらによってどのような志向が動いていたかを調べて見ると、まず彼がさまざまな文章あるいは自作年譜中に書き留めている書物は、前述以外に、前半には『太平記』『八大伝』『雪中梅』『明治四十年の日本』『経国美談』など政治小説が多く、父の死（明治二十七年十一月）以降は村井弦斎、尾崎紅葉、泉鏡花、樋口一葉（特に『にこりえ』）などに及んで来る。雑誌としては前半に「国民之友」「太陽」など、後半に「文学界」「帝国文学」「文芸倶楽部」などで、ほぼ読書傾向に対応した変化を示している。そのような読書環境のなかで秋江の意志がどのような方向をとろうとしていたかを見ると、まず十三歳（明治二十一年）の十月、父のすすめに従って僧侶になる志を立て、天台宗の寺に入ったが姉たちの反対によって二月で実家に帰り、十七歳（明治二十五年）の三月には同村の有吉家の養子となったが翌月離縁、中学に入るころには父に画家となることをすすめられ、兄には医者になることをすすめられたが、ともに秋江は従わなかったという。そのころ秋江がなにを考えていたかについては、次のような文章がある。

「それでは一体何になるつもりかと反問せられて答ふる所を知らなかった。けれども彼にはその時から、自分だけには、茫漠としてゐながらも形を具へた目的のやうなものが有るやうな気がしてゐたのであつた。それは医者とか画家とか又は軍人とかいつたやうな一定した職業の人間にならうとするよりも先づ人間になりたいといふ希望が旺盛であつた。人間は、専門の職業を身に習得して生涯無難に口を糊して通る前に、何か人間としての目的がなければならぬ。人間の存在はそもそも何であるか。自分はたゞ生活の為に学問を修めたくはない。況んや低卑な技術に没頭して生涯を終はるといふことは堪え難い失望である。自分はたゞ人間としての価値を意義あらしめたい。」⁽⁸⁾

ここで秋江が人間として価値ある存在とか仕事とかいう内容は、前に見た秋江の環境のなかで、他のいろいろの文献と照らし合わせて具体的に押えて行けば、それはおそらく天下国家のことを考えることであつたろうと思われる。そしてそれが、秋江にとっては文学に通じていたはずである。秋江は自作年譜⁽⁹⁾のこの頃の部分に「ただ自分はひたすら文章家たらんことを以つて少年の理想としたり。それとゝもに十五、六歳の頃より政治といふものに興味を持ちたり。」と書いている。人間としての価値を意義あらしめることと、文章家たらんとすることと、政治に興味をもつこととは、少年秋江にとつて一つのことだったのである。だから、彼が文章家になろうというのは、こんにち風の文学者になりたいということではなく、政論家の意味であつたに違いないのである。それは、たとえば彼が上京して入学すべき学校を選ぶ際に「早稲田の文科は又あまりに純文学に狭められてゐて、彼の期待する人間としての教養に意を払つてゐないやうな感じ⁽¹⁰⁾」をもつたという考え方にも現われていよう。だから彼は年譜にも「小学校時代大阪朝日新聞の小説を読みたる外未だ嘗て所謂軟文学には一指だも触れざりき。予の志は依然として硬派の文章家たらんとするにありし」と書くのである。

しかしそれならば、そのような秋江が、情痴文学、遊蕩文学と呼ばれるような、「別れたる妻に送る手紙」のような作をなすようになったのはどういふことなのか。秋江文学の性格を考える上で、その点が一つの問題点になるであろう。

ここで一応注意しなければならないことは、さきにも指摘したように、明治二十七年の父の死去のあたりを境にして秋江の読書傾向が変わつてゐることである。それ以前に彼の意志が一貫して文章による経世家を理想としていたことは、すでに見て来た通りである。それではその後はどうであつたか。父の没後、東京での学業を廃して帰郷したまま上京の志を果たさず、病床についた秋江は弦斎、紅葉、鏡花などの軟文学に親しんだという。そこには、おそらく

秋江の一つの挫折感が挿まっているだろう。彼の文学に対する態度なり意識なりに、そこで一つの屈折がおこったであろうことが考えられる。しかし、秋江は自分が軟文学に親しんで行った事情を次のように回想している。

「十四、五歳の頃から日本外史を読むことを教へられて、それを愛読することを覚えたり、可なり早くから八犬伝を愛読したり、矢野文雄の経国美譚に心酔してゐたりするにも係はらず、たゞ名ばかり聞いてゐた尾崎紅葉の小説などを讀まうとする心が何故か生じた。然るに一度、文藝俱樂部に發表された樋口一葉の『濁り江』といふ作を讀んでから彼は今まで遂に心に経験しなかつた、ある深い人生といふものに会つたやうな気がしたのであつた。そして、今まで彼が、誰れに教へられるともなく、何となしに戯作として卑んでゐた小説であつても、一葉の如き深い人生を發表はすことが出来るものならば、小説も亦た有意義である。いつそ小説を書くことを研究しやうかといふ心が近頃になつて萌してゐたのであつた。彼はそれよりずっと前から、文章は経国の大事なりといふことを何からか知つてゐた。それから又治国平天下の文学といふことをも知つてゐた。自分は将来文章を以つて身を立てるには、どうしても経国といふことを以つて念としなければならぬと思つてゐた。さういふ空想や希望を抱いて彼自身心密に誇つてゐた。……(中略)

……自分は何処までも先づ人間になるべき學問を修養し、将来それを文章の上に發揮するのだぞと思つて、動もすれば失望に沈み勝ちな自己を引立てたり、或時は一人で意氣軒昂となつたりしてゐた。今の世の日本外史や八犬伝の著者にならうとするには、どういふ学校へいったらいいかと思つたが、何処にも満足を与へさうな学校がなかつた。それで、今度東京に行つたら樋口一葉を訪ねて小説を書くことを習はうと思つてゐたのが彼の上京した目的の一つであつた。」⁽¹⁾

これは、明治二十九年九月の、二度目の上京の際の心境を語つた文章であるが、これによつて、彼がいわゆる軟文学に接近していったことについても、彼の文学觀の根本的な変質を認めることはできないように思う。方法として、評論から小説へという移行の契機はなしたかも知れないが、彼が一葉のなかに発見したものはやはり「ある深い人生」であり、「小説もまた有意義」だということであり、「今の世の日本外史や八犬伝の著者」になるために一葉に師事しようということだったのである。一葉には、「にぎりえ」(文芸俱樂部)明治二八・九)を發表する一年半ほど前の日

記に「わがこゝろざしは、国家の大本にあり。」⁽¹²⁾ という有名な記述があるが、そういうものが秋江にどこかで響き合ったのであろうか。不幸にして秋江の上京後二カ月ほどして一葉は没してしまったので、秋江はついにその志も達することはできなかった。そこに秋江の第二の挫折があったかも知れない。おそらく、小説家たろうとする彼の意図はそこで潰えている。やがて「何れと歴々指摘すべからざる人生の理想に悩惑して精神の疲労を」覚え、「何となく精神教育に於て一点最も肝要なるものを欠くるが如き感」(年譜)のあった東京専門学校に学ぶようになったのは、決して彼の年来の理想を貫く道程ではなかったはずである。しかし、父の死去によっても、一葉の死去によっても、不本意な早稲田への入学によっても、彼の文学に対する意識や人生に対する態度が基本的には少しも変わらなかったことだけは確認できるであろう。早稲田を卒業するころの秋江が「蘇峯と樗牛との文章あれば、以つて吾が読書慾を飽満せしむるに足るとさへ」⁽¹³⁾ 思っていたという事情も、右の推定を裏付けるものである。

そこで、秋江は早稲田を卒業する明治三十四年、島村抱月の誘いによつて、まず読売新聞の小説月評から文筆生活に入るようになったが、彼が批評家としてまず登場したことは、彼が本来志していた文筆の仕事としては不本意なものではなかったと考えられる。秋江は文学批評ということについて、次のような見解をもっていたからである。

「文学を、たゞ単に小説戯曲を作ることのみ考へたくない。無論、小説戯曲を作るのも可なり、小説戯曲の創作必ずしも下品ではない。けれども、評論を書くといふことは、更により上品な、貴族的なことではないかと思ふ。これは、私が時々言ふことであるが、評論といふのは、単に、小説戯曲の批評をするといふことではなくつて、人生、社会の批評である。(略)……評論を書くことは、筆を執る仕事のうちで、最も高尚な仕事であると思ふ。(略)……芸術を取り扱ふ人の頭は、極めて、實際的で、具象的である筈だ。この實際的で具象的である頭を以て、硬派の評論をしたならば、よからうと思ふ。(略)……つまり、文学者と政治家とを掲きまぜたやうな立場から、評論をする人をはしいと思ふのである。」⁽¹⁴⁾

このような理解に立てば、「文章は経国の大業なり」ということばを理想として来た秋江にとって、評論に従うことはきわめて当然だったのである。そして、事実、明治三十四年以降、明治四十二年までは主として評論家としての仕事を残しているのである⁽¹⁵⁾。

そういうことは、秋江にとつて、創作は必ずしも彼の本意とするところではなかったということの意味することになるであろう。それは、次のような事実からもさらに明らかである。

いまここで考察の対象の最初に立つ秋江の小説の出世作「別れたる妻に送る手紙」の発表は、明治四十三年四月から「早稲田文学」に連載され始めたものであるが、その直後の時点で、すなわち同年五月十三、四日に、秋江は読売新聞に次のように書いているのである。

「▲全く何をして見ようといふ氣も起らぬけれども、さうかと言つて、まさか死なれもせぬから、生きて行くには、兎も角も比較的に身に叶つた文筆に従ふより他に仕方がない。それには何うしても小説を書くのが比較的収入が多い。私も贅沢をしようと出来ないが、錢の少ないより多いが好いから、評論は止して小説を少し書いて見ようかと思つてゐる。」

「▲何故に創作が、自分の心を汚化するやうに思はれ、何故に評論が自分の心を淨化するやうに思はれるかは、再度省みても分らない。唯、私には何となくさう思はれる。私は、理想を云へば矢張り批評家であらう。けれども職業としては小説の創作をせねばならぬ。さう思ふと、何だか、私は自己の好む処を生活の犠牲にしたやうな氣がする。」

小説というものをこのように観じていた秋江が、その不本意な小説というものに手を染めた時期は、実はこの時点よりさらに二年半ほど遡る。こんにち、彼の小説の処女作は明治四十年十一月の「早稲田文学」に発表された「食後」であるとされている。秋江が不本意な売文を決意しなければならなかったのはその頃からということになるわけだが、ではそこで秋江は小説になにを描いていたか。その処女作「食後」は『新選近松秋江集』（昭和三年十月、改造社

刊)では「明治四十年九月作」と註記されている。おそらく自註であろう。その時期はちょうど田山花袋の「蒲団」が発表されて文壇に大きな反響を呼んでいた月に当たる。秋江のこの作が、素材を自己の明治二十九年秋当時の経験にとつて、同宿の青年が初めて女を知った時の話をするという内容の、事実を描く作品になっていることは、おそらく花袋の「蒲団」に影響されたものである。ただここで一つ注意しておいてよいことは、明治二十九年という年は、「私は生きて来た」(中央公論 大正二・二九)によれば、秋江がその同宿の青年に誘われて初めて新宿あたりで娼婦を知った頃なのである。花袋の「蒲団」などに影響されて、初めて女を知る事実談を書くとなれば、秋江にとってはその自己の体験の方がはるかに小説の種としては効果的な素材であったはずであるに拘らず、同じ頃を素材にするにも友人の話をこの「食後」で扱ったところに、初期秋江文学の特色と性格とを見ることができであろう。⁽¹⁶⁾以後秋江は「別れたる妻に送る手紙」までに小品をも含めて十編前後の作品を発表して、そのほとんどが自己の体験上の事実を、結構を加えずに随筆風に、時には一人称の談話体で叙述する方法をとりながら、⁽¹⁷⁾花袋のように自己自身の醜事実を暴露的告白的に書くということはほとんどなかったのである。そのことに關して注意されるのは、「別れたる妻に送る手紙」発表の前月、明治四十三年三月に発表された「雪の日」(趣味)の叙述である。

「雪の日」には、秋江自身がモデルである雪岡という人物が、妻の前歴に關して嫉妬する場面に、次のような記述がある。

「それが為めには私は身体が瘦せるまでに悲しみ悶えた。併しながら、それが何ういふことであつたか、此処ではそれを言ふまい。——或は一生言はない方が好いかも知れない。いや、言ふべきことでないかも知れぬ。断じて言ふべきことでない。何となれば自己の私生涯を衆人環視の前に暴露して、それで飯を食ふといふことが、何うして堪へられよう！」

私は、まだ此の口を糊するがために貴重な自己を売り物にせねばならぬまでに浅ましく成り果てたとは、自分でも信じられない。」

この考え方は、初期の小説を通じて、この「雪の日」においても貫かれている。この作の主人公は雪岡とその妻スマ

という名で登場する秋江夫婦で、雪岡がスマの昔の男関係に嫉妬を感じていろいろと聞き出すという筋なのだが、その嫉妬やら妻の前歴などを売り物にしていない。スマは米屋に育ち、兄嫁が来てから兄にないがしろに扱われて家にいるのがいやになり、すすめられるままに嫁ぐが、その夫が花札のかけに溺れるので、愛想をつかして飛び出して料理屋で働いていたという前歴の持ち主ということになっているが、そのおスマは、「……私はもう大した慾はありません。一生何うか斯うかその日に困らぬようになりさへすれば好い。」というような女である。これは、徳田秋声が、『微』（『東京朝日新聞』明治四四・八一―一）のなかで、その妻お銀に「子供にも然う不自由をさせず、時々のもでも著て行ければ私は他に何にも望みはない。」といわせているのに通ずるもので、うき世の辛酸をなめ尽した女のあきらめと、それに伴って、貧しくとも平凡な生活への望みを訴えるわびしい女の姿を客観的に描いた、いかにも自然主義的な作になっている。雪岡の、妻に対する嫉妬も「最早以前のやうに胸のわくわくすることはなかった。それは何ういふ理由であらう？ 愛が薄くなつたのであらうか。それともまた愛の爲めに其様なやくざな思ひがいつしか二人の仲に融けて流れて了つたのであらうか。分らない。」という風に扱われていて、妻に対する嫉妬は作品においては二義的なものになっている。

つまり、ここまでの秋江は、評論を本命とし、売文のために小説を書いて作品に自己周辺の事実は描いても、自己を売りものにするところではなかった。彼の文学観はそこまでは崩れていないのである。

そういう秋江が、その翌月の「別れたる妻に送る手紙」では、かなりはつきり自己の痴情を売りものにするかの如き作品を書くに至ったのはどういう事情であつたのか。

三、「別れたる妻に送る手紙」から「疑惑」まで

「別れたる妻に送る手紙」は、明治四十三年四月から七月まで「早稲田文学」に連載された作品である。いま、前

述のような視点からこの作の性格を考えて見るについては、ここで従来見落とされて来た一つの事実を指摘しておくなければならない。それは、この作の連載の最後、明治四十三年七月号の作品の末尾には「前篇終り」と記されていたのだが、その後篇を、やや時間をおいて、秋江はやはり「早稲田文学」に書いていたということである。それは大正二年四月の「執着」という作品で、それにはサブタイトルとして「別れたる妻に送る手紙」と書かれていた。ところが、のちの複製の段階で、前者からは「前篇終り」の記載が省略され、後者からはサブタイトルが脱落したために、この正統の關係がこんにちまで軽んじられて来たのである。もちろん、正統といつても、続篇の「執着」はその末尾に「(大正二年―註)(三月十五日午前三時半認む)」と後記されている作品で、前作「別れたる妻に送る手紙」との間には、この一連の作の素材となつてゐる事実に関して、作者の心境の上に重大な変化をもたらす事実(それが次の「疑惑」に扱われる事件)が起つてゐるから、作品の質はかなり変化を見せており、それは本稿の考察を進めて行く上で問題にしなければならない重要な点であるが、それはあとに廻して、まずここで注意したいのは、この続篇のなかで、作者が前篇執筆の時の心境や事情を説明していることである。秋江はそこで前篇を発表した事情を次のように書いている。

「私の遣る瀬のない胸を打明けて静と聴いてもらはうと思つた人間は、東京にゐる私の目上の人達でもない、また故郷の母や兄でもない、唯お前一人にだけ聴いてもらひたかつたのだ。古いことだが知らぬが仏とはよく言つたものだ。私は何にも知らないから、あゝして正直に、思ふことをお前に訴へたのだ。けれどもあの手紙は、お前の兄さんの処へ送つたから、そのまゝ留め置るか、反古にするかして、お前は遂に見なかつたさうである。もしあの時お前がそれを見たら、少しでもお前に良心があつたなら、あまり好い心持ちでそれを読めなかつたらうと思ふ。」

これによつて、「別れたる妻に送る手紙」という作品は、秋江が妻に読ませたいがために書き、逃げた妻が立ち寄る

だろうと想像される妻の兄の許に送り、もし妻が良心をもつてこの作品を読めばおそらく悔悟するであろうという期待をもっていたことがわかる。それから察すれば、この作における自己の情痴の暴露は、それを作品として売りものにするというよりは、それを妻に見せつけての効果の方を計算して書かれたものであったと考えなければならぬはずである。

そのような妻への直接的な効果の計算については、この「執着」の冒頭に、

「お前は、私が何と言って口説いても、少しも私の心をくんでくれようとはしない。あの時分の頼りなさといふものはなかつた。この頃だつて矢張り頼りないに違ひはないけれど、あの時分は、あゝ言つて、お前は、もう何処かへ嫁いてゐるのかも知れぬと思つたから、もしさうだつたら私から手紙を遣つては済まぬ。とさへ、私は堪へられない悲しみをじつところへて、義理を尽して書いたつもりであつた。」

といつてゐることによつても明らかだし、またそのような配慮や計算は、自己の情痴を売りものにしているのではないという点で、前引の「雪の日」の一節と矛盾しないことになるはずである。

「別れたる妻に送る手紙」における情痴の暴露的描写とはおそらくそういう性質のものである。そのような効果の計算は、単に妻に対する配慮だけのものではなく、以後の秋江文学の一つの性格として、次のような点からも説明できる。

それは、たとえば「別れたる妻に送る手紙」のなかで、待合にゐる雪岡（秋江）が新聞社にゐる長田（正宗白鳥）に手紙をやる場面がある。作中に、そのやった手紙がどんなものであったかは書かれていないが、白鳥が「近松秋江」（「文芸」昭和二五・四一六）のなかに書いているのによれば、「原稿は今此処で書いてゐる。もう二、三時間したら書上げられる筈だ。完成した上で引替へに稿料を貰つたらいいのだけれど、時間がおくれると君が社にゐないだらうから、

今この手紙を届けることにする。この使に七円ばかり渡してくれないだらうか。無論、必ず今夜のうちに原稿を社へ届けて置く」という意味のものだったという。それに対して、秋江の小説では、「主筆も編輯長もまだ出版社ねば、その金は渡すこと相成りがたく候」という長田（白鳥）の返事を受けとることになる（白鳥の小説では、「その金渡し難し。必ず原稿引替へを要す。僕があなくても、六時頃までなら、Sが社にあるから、S宛てで届けてくれ。Sにさう云つて置く」という意味の返事をもたせたと書いている）。その白鳥の返事が秋江を憤慨させたことがこの作後半の一つの山になっているわけであるが、このような作品が発表されたことについて、正宗白鳥は右の作品のなかで次のように書いている。

「……私は一驚を喫した。それは意外であつたが、実は意外ではなかつたので、彼は私などに対して憤懣を感じることがあると、面と向つては云はないで、小説のなかか雑文のなかにそれを書いて気晴しにすることがよくあつた。これは、秋江だけではなく、いろいろな作者のやりさうな事であつたが、秋江のは、これが怨みを晴らしたぞと云つた趣きが見え透いてゐた。私については幾度もそれをやられた。」

白鳥は「私には人類のうちで、秋江一人だけは分つてゐるやうに思はれる」とまで書いているが、その白鳥の眼をもつてしても「別れたる妻に送る手紙」の少なくとも後半の作意は、白鳥に対する憤懣を晴らすためのものであつたと理解している。このような発言から推しても、白鳥に関する部分をも含めて、秋江がこの作全体に、実用的な効果を期待していたことが、より一層明らかになるであろう。

実は、いち早く生方敏郎も秋江を評して「彼の胸には打算がある。彼は殆んど如何なる場合にも功利主義を離れ得ぬ男だ」といい、『別れたる妻に送る手紙』は別の意味から純粋な芸術品ではないのだ。之には先に云つた彼の功利主義が闖入してゐる。あたふ芸術は功利主義の為に悲惨に蹂躪されてゐるのである。……（略）……此頃彼の妻は何処にか姿を隠してはゐたけれど、まだ独身でゐるものと秋江は思つてゐた。それ故若し自分が小説として書いた此悲し

い懺悔を、若しも女房が読むならば再び帰つて来るだらうと、さう思つて彼は此小説を書いた。それ故其題も広告を一眼見て、女房が直ちにそれと悟る様に長きを厭はず、『別れたる妻へ送る手紙』とした。」と推定していたし、近くは館岡俊之助氏も同じ趣旨の問題をこの作の後半に見出して「男の報道する気持に不純なものが入つて来て、見せつけるような邪心が感ぜられて、それがこの作品を濁つたものにしてゐる」と指摘していた。⁽¹⁹⁾

むろん、作品が作品として公表されるものである以上は、前述のような理由のみで作品が成立することはできないかも知れない。秋江はこの作品をも含めたみずからの作品集に解説して次のようにいつてゐる。

「この作者は何故に、自己の愚を、些の羞耻の念もなく曝露したかといふに、愚かなる人間は、かういふことをも経験するものである、そこには偽らざる人間の真があると思つたから、そして、その行動と、心理の状態には、描いて、もつて一篇の小説にするに足る特色があると信じたから、敢へて、自己の羞耻に対して、暫く瞑目して、それを題材として創作の筆に出でたのであつた。」⁽²⁰⁾

伊藤整氏が秋江のこの発言を受けて「いささか芸術主上の言葉である。小説を書くために材料として経験があり、時によつては経験が敢へてそのために作られるといふ可能性も生れる。」⁽²¹⁾と批評しているが、それは秋江文学全体、とくに大正期以降については考え得ることだが、「別れたる妻に送る手紙」には当てはまらないことである。そもそもこの秋江の発言自体が自己の作品集の総体に対して回顧的に整理してなされたものであつて、その発端に立つ「別れたる妻に送る手紙」の作意をこの概括で説明することはできない。この作品は、芸術主上のというよりはもつと功利的な意図をかなり露骨に感じさせるものである。ただ、ここで秋江がみずからの行動を「愚人の愚行」といつてゐることは興味深く、それはこの集の扉に「人間の真実を書き表はすことにどうして文学的価値がないといへようか、経世家でも哲人でもやつぱり個人の生活を知らねばならぬ」と書きつけていることと照応して、秋江の人間認識の変わらざる根底をのぞかせるものである。愚かなる人間の愚かなる行ないを知ることには「経世家でも哲人でも」必要だと

いう。このような意識は、すでに見て来たように秋江の幼少期から晩年に至るまでであったものである。⁽²²⁾ そのような秋江であつて見れば、彼がこの「別れたる妻に送る手紙」に托したのは、やはりこのような作作家としての生命を賭けることではなかつたはずである。「文章は経国の大業」と観じて成長し、文筆を以てしか生計を立て得なかつた秋江が、妻の逃亡によつて精神的にも、評論で立てないことによつて経済的にも、生活に窮した結果として、自然主義的流行に乗つて書いた、生活の糧であり、現実的効果を期したものであつたはずである。そのような点で、花袋の「蒲団」などは、同じような自己暴露的なタイプの作品でありながら、かなり異質のものになっている。花袋の場合は、とにかく事実を客観的に追求しようとする文学的意識が主であつた。しかし秋江の場合、これは戯作だつたのではない。⁽²³⁾ 平野謙氏が『別れたる妻に送る手紙』にはまだ作者の余裕みtainなもの、あそびみtainなものが感ぜられる」と指摘したのは、おそらくそういう事情と照応するであらう。ただそれが、別れた妻に訴える愚痴を、あるいは妻を嫉妬させるための自己の痴態を、主情的にさらけ出す姿勢をもつていたのだから、これを出世作とする秋江が、痴人秋江らしい出発と評されたのもあるいはやむを得なかつたのかも知れない。

「別れたる妻に送る手紙」が、秋江にとって、小説に徹することよりは戯作的姿勢によつて書かれたものであつたことは、以上に検討して来た通りである。それならば、それから、私小説の典型と見られる「疑惑」に至るまでの秋江の文学的展開はどうだったのか。秋江はみづから自作年譜に「疑惑」を『別れたる妻』の結篇とも見るべし」といつているが、それはストオリイの上でそうであるとともに、秋江文学の道程としても一サイクルがそこで終つていたのであつて、以降はその同じサイクルの反覆に過ぎない。宇野浩二の整理によれば、秋江の作品には「別れた妻」物、「大阪の遊女」物、「京都の遊女」物、「鎌倉の妾」物、「子の愛」物といった範疇があるが、それらの作品群の展開の相は、どれもほとんど同型で、それは「別れたる妻に送る手紙」から「疑惑」までの過程に出来上がつてしまつ

ているものである。それだけにその間の秋江文学の展開は注意されなければならないし、本稿が「別れた妻」ものに焦点を絞って近松秋江論を試みたのもそのためである。⁽²⁵⁾

「別れたる妻に送る手紙」に続くこの系列の次作は、すでにふれたように大正二年四月の「執着」(「早稲田文学」)である。これは「別れたる妻に送る手紙」というサブタイトルがあるとともに、「またしても私は、お前に手紙を書く。先に長い手紙を書いてから、満三年になる。」という書き出しをもっていて、前作に直結するものであることが明らかである。そして「あの時の手紙は、私が最初書かうと思ひ立つたことを半分しか書いてゐない。」という思いと、あの手紙を書いた後に、その妻が自分のすぐ近くに、かつて自分の家に下宿していた学生と同棲していたという事実を知った憤りとが、この作の作因となっている。ただこの作をなした時、秋江は大阪にいたはずである。前年の大正元年八月末に関西放浪の旅に出て以後、京阪各地、堺などを転々としていた時期であり、すでにいわゆる「大阪の遊女」ものの主人公との関係が生じていることは、この作発表の翌々月、大正二年六月に「大阪の女」(「新潮」)などを発表していることによって明らかであろう。

そういう段階で、秋江がなぜ別れた妻に対する怨みがましい文章を、三年も前の作品の続篇として発表したのかとなれば、それはやはりこの時期が来なければ書けない続篇だったからである。その創作の秘密については平野謙氏の次の指摘が最も鋭く解明している。

「秋江は新しい女を知ってから、はじめて前の女との関係をつぶさに描くという執筆態度をとったようである。新しい女を知ることが、前の女に対する執着から解放されたことを意味するが、そのときはじめて秋江は前の女に対する執着や怨恨を綿々と懸える作品を書くことができたのである。同時に、その執着や怨恨は女の方から行方をくらまし、その行方をやみくも追跡することのなかに、いっそう深められるような性質を持っていたのを、私どもは知り得る。ここに秋江の恋愛と執筆のパターンがある。」⁽²⁶⁾

つまり、大阪の遊女との世界において、もはや別れた妻を失うことに對する不安は、現実的には消滅したことを意味するのである。だから、前の作を書く時には「お前は、もう何処かへ嫁いてゐるのかも知れぬと思つたから、もしさうだつたら私から手紙を遣つては済まぬ」（「執着」）という現実的配慮が大貫マスに對して働いていたのに對して、この「執着」はそういう顧慮を一切捨ててマスの侮辱的行為に對する積極的な復讐心によつて貫かれてゐる。ここでは、もはや、これを読ませることによつてマスを手許に取り戻そうという意図は全くない。むしろ逆に、相手の破廉恥を露骨にあげたて、傷けることに比重がかかつてゐる。「別れたる妻に送る手紙」と「執着」とにはそういう差が生じてゐる。しかし、兩作がともにある現実的な効果や意図をもつていたという点では共通する。

ここで、「執着」という作品が一般には目に触れにくい作品であるとともに、次作「疑惑」と内容的に關連するふしがあるので、そのあら筋を述べておく。作の主人公は、前作と同じ雪岡とお雪で、雪岡が八私Vという一人称でお雪に八お前Vと呼びかけて書く書簡体の作品である。あの手紙（「別れたる妻に送る手紙」）を書いた明治四十三年七月、長田の弟（白鳥の弟、正宗傳三郎）が私の下宿を訪ねて、妻は必ず戻るとなぐさめてくれた。やがて私はお前の母との共同生活をやめ、喜久井町の家から出る時に、お前の母にお前の行方を聞くと、女の子一人ある年輩の人の所へ行つたといわれた。私はそれを信じ、もう諦めねばならぬかと、いたたまれぬ思ひだつた。ある時は伝通院の近くにいると聞いて、近くの警察に搜索を哀願して見たり、またある時は長田がお前に会つたという話をたよりにお前をなつかしんだりした。築土のお前の姉（およね）やその夫の新さん（椅子屋）を訪ねて行方を聞いても、「皆なが今ぢや狂氣のようになつてゐるんだ。……貴下もさう。お雪もさうだ。……お話しにも何にも成ない……」といわれる。私はその言葉を聞いた時、フト、お前が篠田（自分の家に下宿させていた学生）とでもあいびきしてゐるのではないかと思つた。そして、なんとかして出し抜けに踏み込んでやりたいと願うようになった。私はその後八月末から十一月初めまで塩原に行つて、国民新聞の連載を書く用意をしていたが、新聞の都合でとり止めにになり、十一月六日に東京に戻つて、

またお前の姉の家をたずねた。そしてその近くに住むお前の母をも訪ねると、母はその妹と二人で暮らしていた。その妹から、遠くへ行ったらしい話を聞いた。前の手紙を書いてちょうど一年たった頃（四十四年四月）、こんどはその婆さんから、三月末にお前たち夫婦が新吉のところへ来たという話を聞いた。私は何としても二人を探し出そうと思い、執拗に追求すると、話のはしはしから、二人が去年の夏に日光へ遊びに行ったという事実を聞き出した。そういえば、去年の秋ごろから新吉の家には日光土産の品物があつた。それを入手すれば泊つたところもわかるかも知れないと思つて、何としてもそれを手に入れたと思つた。そして、お前を襲つて、ピストルで一発に打ち殺してやりたいという思いで夢にもなやまされるようになった。

「執着」はそこで終つてゐる。実はその終りの部分がそのまま次のこの系列の作品「疑惑」の冒頭に続くのであつて、「執着」と「疑惑」とはまた一連の作だということが明らかになる。「疑惑」の冒頭で、いきなり警察に捜査願ひを出す唐突さも、実は「執着」の結末でお雪夫婦が東京の近くにゐるらしいという推測が成り立つことを受けてゐるので、連作として見れば自然である。また、「前の手紙にも言つたやうに、私はどうかしてその新さんの処にある日光の団扇が杯が見たいと思つたが、それは手に入らない。」という「疑惑」の突然の表現も、「執着」を前におけば了解がつく。「執着」は「別れたる妻に送る手紙」の続篇であるとともに「疑惑」の前篇でもある。したがつて、これは一貫した一つの連作として見なければならぬ性質のものである。ただその連作の間に三年の歳月が挿まり、その間にこの素材になつたできごとと、それに対する秋江の態度とがかなり大きく動いてゐるため同じ一連の作でありながら、執筆の時期によつて、秋江の作品に対する意図も動いてゐるのである。その変化のなかに「疑惑」が「金無垢の私小説」といわれる事情が起つて来てゐるはずなのである。したがつて、「疑惑」では問題をそこに絞つて考えなければならぬのだが、「別れたる妻に送る手紙」と「執着」との性格の異同はさきに述べた通りであつた。それでは「執着」と「疑惑」との間にはどのような違いが生じていたであらうか。

「疑惑」は、大正二年九月に「新小説」に発表された作品である。この作品の内容は、すでによく知られているように、妻の泊った宿を探し当てるべく、日光へ行つて警察に頼んだり、宿屋を一軒一軒廻つては事情を話して宿帳を見せてもらい、疲れ果ててあきらめかけた最後の一軒で、ついに去年の夏に妻がもとの下宿人の学生児島欣次郎（これは「執着」では篠田となっており、妻の名は「執着」ではお雪だったがこれではスマになっている。）と泊りに来ている事実をつきとめるという筋である。

このような作を発表して、いったい秋江はなにを得たのか。ここで注意しなければならない前作との決定的な差は、「疑惑」を発表して秋江として現実的な効果を期待し得ることは全くなにもなかったということである。「別れたる妻に送る手紙」「執着」にはそれがあつた。しかし「疑惑」では、逃げた妻の行状について確証をあげることによつて相手を傷つけ、凱歌をあげたつもりでも、それは結局事実を突きとめ得た自己満足にとどまるもので、結果的には、これは自己の醜態をさらけ出す以外のなにもでもなかった。平野謙氏は、

「いやらしい自我の形骸がほとんど冒説的とみえるほど、そこにはりつけされている一点にこそ、『疑惑』の金無垢の性格が定著されてあつたのだ。なぜこのような愚かしい男の執念がかくも無慙に剔抉されねばならぬか、ほとんどその無目的な破廉恥に読者が当惑するほど、その自己剔抉の筆づかいは微細にわたっている。」⁽²⁸⁾

という。まさにその点は、この一連の作のうちで、「疑惑」に至つてはじめてかち得た世界であつた。ここで秋江は、「別れたる妻に送る手紙」を書く当時に「自己の私生涯を衆人環視の前に暴露して、それで飯を食ふといふことが、何うして堪へられよう！」（雪の日）といつていた矜持を、全くなげうってしまった。他になんの期待もない。すべてを投げ棄てて、ただ自己の醜態をさらけ出すという自虐性においてかち得た事実の確認ということで秋江文学が一つの結着に到達し得たということは注意しなければならないであらう。そして、そこに私小説と呼ばれるものの

典型ができ上がったということは、後期自然主義文学の発端として重要な意味をもっていると思われる。

(昭和四十二年十二月稿)

註

- (1) こんにちの近代文学史の一つの礎石をなしたと考えられる吉田精一著『明治大正文学史』(修文館・昭和一六・三)では、自然主義思潮を明治三十九年より四十三年までとして叙述し、その後、大著『自然主義の研究』(東京堂・上―昭和三〇・一一、下―昭和三三・一)では「三十九年―四十五年の期間に於けるいはば自然主義時代を、自然主義運動研究の本来の対象と」する態度を示されている(下巻六頁)。

片岡良一編『日本文学―近代』(岩波小辞典・昭和三三・六)では自然主義運動を分析して「明治四〇年前後の三、四年間が本期」であるとし、その後を自然主義の、前期、分化期、成熟期、後期などの名称で説明している。同氏著『自然主義研究』(筑摩書房・昭和三二・一二)もその秩序で組み立てられている。

自然主義文学の時代区分に関しては、右二氏の説がこんにちの標準になると考えられ、他の多くの文学史書を参照して見ても、戦前・戦後を通じて、自然主義時代を、日露戦争以後から明治四十三年まで、あるいは明治末年までと捉える二つの考え方は、ほとんど動いていない。

- (2) 吉田精一『自然主義の研究』上巻序論(特に一三頁)。

- (3) 自然主義を前期と後期とにわけて考える考え方が当時すでにフランスなどについては考えられていたことは、抱月がこの論文のなかで「我が自然主義にも前期後期の区劃を生ずるに至つた。」といっていることでも推察されるが、このようにいい方をしたものとしては田山花袋の「作者の主観(野の花の批評につきて)」「(新声) 明治三四・八」に「前自然主義」「後自然主義」という区分が出て来るのが早い例であろう。

- (4) これは編者没後に出版されたもので、猪野謙二、小田切秀雄、片岡懋三氏の筆が加わっているので、どこまで編者の判断かは明らかではない。なお、同項目のなかには、谷崎潤一郎をも後期自然主義派に入れる橋爪健氏の説などもあることを紹介している。そして、編者の思惟する後期自然主義の作家とは、大正中期以降の藤村・花袋・秋声などのほか、近松秋江の愛児もの、広津和郎、谷崎精二、葛西善蔵らのかつての「奇蹟」派の人々を中心に、加能作次郎、宇野浩二、加藤武雄、中村武羅夫、水守亀之助、岡田三郎、

水野仙子、下村千秋、嘉村礪多らの作品だとしている。

(5) 「私小説の二律背反」(昭和二六・二〇『文学読本・理論篇』所収、昭和三三・一『芸術と実生活』講談社所収)

(6) 近松秋江『文壇三十年』(千倉書房・昭和六・一)七五頁。

(7) 同右二七六頁および二八〇頁。

(8) 「私は生きて来た」(『中央公論』大正一二・九)、『新選近松秋江集』(改造社・昭和三・一〇)所収、五七九頁。

(9) 秋江は大正十四年五月、誕生五十年記念出版『恋から愛へ』を春陽堂から出した時に、その巻末に自作年譜十頁を附載した。以後、秋江年譜はこれを底本としている。これは回想風に書き流した年譜で、こんにちのもののように編年体の整然たるものではないが、ここに引用した部分はその四頁にある。

(10) 註(8)に同じ、五九一頁。

(11) 同右、五八七頁。

(12) 『塵中につ記』(明治二十七年四月―五月)。筑摩版『一葉全集』第四卷一四三頁。

(13) 「自分の見て来た明治三十年以後の文壇」(『文壇三十年』所収、七〇頁)。

(14) 「文学教育の欠陥」(『文壇三十年』所収、四八―九頁)。

(15) 秋江は明治三十四年四月二十二日の読売新聞に「鏡花の『註文帳』を評す」を執筆して以来、読売新聞、「早稲田文学」「新潮」などに多く批評の筆をとり、特に読売新聞日曜附録に連載した「文壇無駄話」は彼の文名を高からしめたものであるが、本稿は近松秋江の小説、それも特に「別れたる妻に送る手紙」から「疑惑」までを考察することに重点をおくので、その評論の動向に関する考証は省略する。ただ、秋江が「別れたる妻に送る手紙」で小説家として文壇に登場するのに、彼のこの評論活動が間接的な役割を果たしていることだけは、ここで注意しておいてよいかも知れない。なぜなら、この『文壇無駄話』は明治四十三年三月に光華書房から出版され、その翌月から「別れたる妻に送る手紙」が「早稲田文学」に連載され、両々相俟って彼の文壇的地位は確立されたと見られるからである。

(16) 秋江が初めて新宿の娼婦の宿に泊った時期は、「私は生きて来た」のなかの叙述が乱れていて、明確ではない。その場面のなかで、「彼は一昨年はじめて東京に来た時にも」という叙述があるが、秋江が初めて上京したのは明治二十七年の秋であり、この叙述に従えばそれは二十九年ということになる。しかし、「もう三月の中ごろのこと」ともあって、これに従えば、秋江は二十七年の秋から二十九年の秋までは帰郷していたのだから、この「三月」というのは明治三十年ということになる。(ちなみに、秋江の「油屋のお神さん―料理屋のお神さん」(『新潮』明治四三・六、「忘れ得ぬ人々」(三)Ⅴ)には、「私は中学校をよして、父の営業して居る店に居つ

た。其処で始めて私は或る人に連れられて女と云ふものを知つた。」とある。それは明治二十七年のことである。

なお、この「食後」の内容について、『日本現代文学全集・45』（講談社・昭和四〇・一〇）附載の「近松秋江年譜」明治四十年の項で、「同棲している女から、以前関係のあった男についての話を聞き、嫉妬に悩む心理を描いたもので、のちの情痴小説の萌芽をここにみることが出来る。」と説明しているのは、「雪の日」（『趣味』明治四三・三）と内容をとり違えた説明で、誤まりである。同じ誤まりが館岡俊之助『自然主義作家ノート』（泉文堂・昭和二九・一〇）の二三三頁にもある。

- (17) 「食後」以後「別れたる妻に送る手紙」までに発表された作品は、わたくしのメモによれば次のようなものがある。「人の影」（『新潮』明治四一・一）、「その一人」（『早稲田文学』同年・五）、「報知」（『趣味』同年・六）、「八月の末」（『早稲田文学』同年・一一）、「お金さん」（『文章世界』明治四二・二）、「一人娘」（『趣味』同年・三）、「田舎の友」（『新文林』同年・四）、「同級の人」（『早稲田文学』同年・五）、「鳩」（『小品』（『文章世界』明治四三・二）、「雪の日」（『趣味』同年・三）。

- (18) この主人公夫婦の作中名は、以後この系列の作品に大体受け継がれているのだが、「別れたる妻に送る手紙」では妻の名がお雪になつてゐる。その点について、平野謙氏は『日本現代文学全集・45』（前出）の「作品解説」で次のように述べてゐる。

「前者（『別れたる妻に送る手紙』—和田註）では、主人公たちは雪岡京太郎、お雪というやさしげな名前が与えられていて、それだけで「つもる話は寝てとける」というような歌の文句を連想させる甘さがあるが、後者（『疑惑』）では、女の名前は本名をひっくりかえしたスマという散文的な名になつてゐる。この両者の相異は、妻の行方をもとめて日光の旅館を風つぶしにさがし、ついに妻の情事の確証をにぎつた心の衝撃に由来している。」

しかし、これは「雪の日」にすでにスマ（当時の妻の本名は大貫マス）という使い方があつたのだし、逆に日光の旅館を歩き廻つた明治四十四年以降のこの系列の作品「執着」（『早稲田文学』大正二・四）にもお雪となつてゐる使い方があつたので、平野氏のこの解釈は当たらない。

- (19) 生方敏郎「文壇のスヒンクス・徳田秋江」（『文章世界』大正二・七）、館岡俊之助『自然主義作家ノート』（前出）。ただし、前者は「執着」を読んだ上で構想されたものである。

- (20) 『明治大正文学全集・第四十二巻』解説（春陽堂・昭和四・一〇）。

- (21) 伊藤整「近松秋江」（『近代日本文学研究 大正文学作家論上』小学館・昭和一八・九）。

- (22) たとえば、『文壇無駄話』のなかにも、明治四十二年二月の文章として「文学者の見たる政治家」という政治論があり、『秋江随筆』（金星堂・大正二・六）にも「社会評論一束」として「予の労働主義」「文士の観たる普選運動並びに議會解散」「軍縮會議の一考察」など、大正期の社会評論が集めてあり、昭和四年に政界人と往来して政局、政変、経済に関心を寄せたこと、昭和九年には反米

反ソ的なジャーナリズムの風潮を憂えて松本学などに一書を送ったことなどは年譜上に明らかにされている事実である。昭和十六年八月の短篇集『三国干涉』なども単なる時局便乗のものではない。そこには、少なくとも主体的に秋江が経世家的な意識を生涯保っていたことが明らかである。

(23) 平野謙「解説」(『日本文学全集・13』新潮社・昭和三九・八)。

(24) 宇野浩二「解説」(『近松秋江傑作選集』第三巻・中央公論社・昭和四一・一〇) 八頁。

(25) 「別れたる妻に送る手紙」から「疑惑」までの秋江の小説を検討することになれば、その間に、いわゆる「別れた妻」ものの系列に入らない作品が少なくとも数篇はあるはずである。そのなかには「伊年の屏風」(『太陽』明治四五・六)のごとき佳作も含まれている。しかし概してこの間のそれらの作品は、他の自然主義作家の作品とほとんど変わらない、自然主義的な客観描写の小説で、格別の問題はない。しいてそれらのなかに秋江文学としての問題を求めれば、それは「別れた妻」もののなかに追求できるのと同じ性質の問題でもある。それで、ここには論述の筋を明確にする意味で問題を「別れた妻」ものに限定し、爾余の作品についての論及は省略する。

(26) 平野謙「作品解説」(『日本現代文学全集・45』)。ただしこの平野氏の発言は、「疑惑」と「大阪の遊女」ものの、「疑惑」統篇と「京の遊女」ものなどの関係の考察から出たもので、「執着」について述べられたものではないが、この作品の場合にもその公式で解けるのである。

(27) 「別れた妻」ものの系列としては、この「疑惑」のあとにもう一つ「愛着の名残り」(『中央公論』大正四・一一)という作品がある。これは平野謙氏が「疑惑」の統篇をも秋江は執筆している。いまその発表年月、発表誌が不詳だが、私の推定をいえば、その統篇は大正四年八月現在の時点で書かれている。(『日本現代文学全集・45』作品解説)といっているもので、この作品は秋江の短篇集『恋から愛へ』(春陽堂・大正一四・五)に収録される時「疑惑統篇」と改題されたものである。「疑惑」の結末は二人が岡山に行っているに違いないと想像するところで終っているが、この統篇ではその岡山のかくれ家を探し当てて踏みこむ場面を結末に、「別れた妻」ものの後日譚風にまとめられた作品だが、「別れたる妻に送る手紙」「執着」「疑惑」ほど緊密な接続関係はなく、むしろその集成的なもので、作品としてはややだれた、ありきたりの私小説に堕している。ここで特に一連の作として考察を加えなければならぬほど緊密な問題意識をそこに求めることはもはや不可能な作品になっている。

(28) 註(5)に同じ。